

大学

1年間の浪人後、静岡大学人文学部法経学科法学専攻（当時）に入学した私は、大学の授業の面白さに感激した。まさに「大いに学ぶ」ところだった。

まずは、東京大大学院卒1年目のM講師（当時）の英語の授業。確か英国の作家の「ジェイコブ」という小説を扱った。その小説が面白かった。日本語に訳す授業だったが、例えば、He is a fox.を、「彼は狐である。」と訳したら明らかに可笑しい。Foxをそのイメージで訳さないと意味が通じない。日本人は大方「ずる賢い」とイメージするが、作者はイギリス人である。イギリス人はFoxをどのようにイメージするかを考えて訳す。文化人類学も加わったような授業だった。私は厚さ10センチもあろうか、研究社の英和辞典や英英辞典も使って単語の語源も調べて訳に挑戦した。でも、その都度先生の訳と食い違う。そこで意見すると、みんなで「いや、こう訳すのでは？」「いやいや、私はこう訳す」と議論が始まる。僅か厚さ1センチにも満たない新書版のテキストが、1年の授業でどこまで訳したのだろうか。半分もいかなかったと思う。言葉の意味の深さを体験した授業だった。

そして、哲学のG教授（当時）の授業。先生は、キェルケゴールの研究者だった。しかし、大学の一般教養の哲学の授業だから、キェルケゴールのみならず、プラトンから始まりサルトル、西田幾多郎まで扱って頂いた。しかし当時の私は、G先生の授業で実存主義の創始者・キェルケゴールにハマってしまった。先生のキェルケゴール研究本や論文のみならず、キェルケゴールと対立したヘーゲルに、カントを読み漁った。そうになると、最悪の事態になる。年度末の単位認定の試験である。

私は400名収容の大講堂（階段教室）に入室後、意気揚々と教卓に置かれた解答用紙のB4わら半紙を10数枚とって最前列に座った。私は、試験題目は絶対にキェルケゴールについてであると決め込んでいた。ところが、先生が黒板に書かれた試験題目は全く違った。私は茫然としていてその試験題目は覚えてないが、確か一般的な哲学についてであったと思う。

私は捨て身に入った。「誠に申し訳ありませんが、私は本テーマについて全く勉強してきておりませんでした。つきましてはそのテーマに代わって、先生の授業で大変興味を持ちましたキェルケゴールについて、法学生の私が学び考えたことについて述べさせていただきます。」で始まる解答を書き始めた。

70分位経過した頃、教壇にいる先生から声が掛かった。「君、まだ書くの？」「えっ！？」後ろを振り返って見たら、400名の大講堂に私以外誰もいない。「すいません、もう少し書かせて下さい」と言って、90分の授業一杯まで書かせて頂いた。勿論、ヘーゲル、カントにも論が及んだ。

後日大学の学生掲示板に、私宛にG教授の研究室に来る旨の掲示が出され、単位を落とした覚悟で、先生の研究室に出向きドアをノックした。「どうぞ」と言う先生の声で入室したら、目の前の机に^①と赤いハンコが押された私のわら半紙の解答の束が置かれていたの

である。私は「えっ!？」と呟いた。先生曰く、「普段は大学の試験の解答は本人に返さないが、この君の解答は記念として返します。確かに君の解答は私が提示した試験題目に対するものではなかったが、君の延々7枚のわら半紙に渡り書かれた内容は、キェルケゴールのみならず、ヘーゲル、カントの著作をもよく読み、それについての君なりの考えが書かれており、試験の判定として(優)に値すると判断した。」と。勿論、記念として持ち帰り残していたが、残念ながら引っ越しで転々とするうちに、失くしてしまった。ちなみに、当時の大学の成績は優・良・可・不可の4段階で、不可は単位が取れなかった。

私が大学時代、有限会社参画に参加するきっかけとなった、神奈川県丹沢山系の夏合宿の参加者募集受付の電話に協力頂いた大学に隣接する喫茶店に、先生はよく来られていた。先生はその時、その喫茶店で私が仲間たちと、子ども達の教育やバレーボール同好会の立ち上げなどを話し合っていたことをよく聞いたことも話された。先生はその年で静岡大学を定年退官した。先生の退官記念論文の最後に、私のこの出来事に触れて頂いた。

大学の退官記念論文に私のことに触れて頂いたと言え、もう一人その年に退官した O 教授(当時)との話がある。それは、私が仲間と自主ゼミ「万葉集ゼミ」を興した話である。

「万葉集ゼミ」と言っても、万葉集に載せられた和歌を解釈するゼミではない。万葉集の和歌は当時、今の歌謡曲のように声に出して唄って楽しんだものである。私をそれを実践してみたく、当時の静岡大学人文学部国文学の O 教授にお願いし、その自主ゼミを開いて頂いた。先生は私をてっきり国文学の学生と思い、二つ返事で快諾してくれた。先生は、「じゃあ、月2回としても何曜日の何時からにしようか?」と、人文学科の授業の時間割を持ってきた。法学専攻の私の時間割とかなり違っていたので、私は「あの～、私は法学生なのでこの時間割では」と申し上げたところ、「えっ!君、ほうがくせい?」と、先生は大変驚かれた。勿論、先生もその年で退官だったので、かなり多忙にもかかわらず、自主ゼミ開設にご尽力頂いた。ゼミに出れない時は、あの「令和」を選定した犬養孝先生が吹き込んだ「万葉集」の貴重なテープを貸して頂いた。確か9月から半年間、ホントに先生には大変お世話になった。

翌年3月ゼミの仕上げに、男子4名女子3名の計7名のゼミ生で、ユースホステル(当時大変安価な宿泊費の若者を対象としたホテル。今では殆ど死後ですが)を使って2泊3日の奈良の旅をした。勿論、先生もお招きしたが、退官行事で叶わなかった。奈良駅でレンタルサイクルを借り、三輪神社、石舞台、橿原・・・と巡り、その所々でみんなで大声で万葉集の和歌を詠って味わった。近くを通りがかったお婆さんに、「君たちは何だね?よく和歌は詠ったもんだと知ってるねえ。」と驚かれた。逆に、お婆さんがそれを知ってることに、私達は驚いた。今、セピア色のその旅の写真を見て懐かしんでいる。

「退官する大学最後の年、私は大変な楽しみな一人の学生に出会った。詠う万葉集ゼミをやってくれと頼んできたその学生は、なんと法学生だった。・・・」と、先生も退官記念論文に私のことを書いて頂いた。大変光栄な限りである。

極めつけは、刑法の N 教授(当時。上記の教授と同様に、N 教授と書いても実名は分か

ってしまうほど有名な先生)の授業。「授業」と言っても、当時有限会社設立で多忙を極め、先生の授業に出ていなかったから、正確には「授業」とは言えない。9月行われた刑法の前期試験の話である。

前の年の10月、私は有限会社設立(資本金400万円)に参画し、学生ながら取締役としてサバイバル的な活動を行う事業を行いながら、学習塾も運営していた。この年の4月、私が以前友達として関わっていた身体障害者の活動取材していた朝日新聞のK記者(当時。彼女の父親は当時有名な雑誌の編集長だった)に、市役所でばったり会った。「ねえ、ねえ。最近、山下君、***** (脳性麻痺の障害者団体事務所)に来ないけど、何してんの?」と聞かれ、「会社を興し、忙しんで」と、ボロリ言ってしまった。記者は「なに、なに、それ。学生で会社を興したの?聞かせてよ」と、強引に市役所脇の喫茶店に連れて行かれ、延々2時間取材を受けてしまった。翌日、私の写真(取材時に撮られたようだが、覚えていない)入りで、朝日新聞静岡版4分の1の紙面で私達の事業が紹介された。朝から電話が鳴りっぱなし。50数名の会員が数カ月で一挙に400名になった。

そんな折の8月の終わり頃、上旬のキャンプと夏期講習を終え、毎日9月に行われる大学の前期試験のための勉強をして、夕方行きつけの寿司屋で夕食を食べていた。その時、傍で毎日当時50代と思しき男性が、魚をつまみに日本酒を飲んでいて、2,3日経ってその男性に声を掛けられた。

「ねえ、君。学生さん?」「あっ?はい」「この近く?」「えっ?はい」「ってことは、静大生?」「あ、はい」「学部は?」「はい、人文ですが」「専攻は?」「一応、法律ですが・・・」「えっ、法律!」「ちなみに今、刑法取ってる?」ヤバい!「あ、はい・・・」「可笑いなあ、私の刑法の授業で欠席者はいないんだけど。しかも、君の顔を見たことがない。」最悪なことになった。えっ!大学の先生だったんだ。まずい。しかも、仕事が多忙で授業に出てないが、今受講登録している刑法の先生が目の前にいる!「先生、大変申し訳ありません。私、昨年10月、私の描く教育を実践するため有限会社を興し、毎日多忙を極め、大学の授業に出れないんです。それで、友達に『代返』を頼み、毎回授業ノートを写させて頂いて勉強している状態です。」「えっ!君があの朝日新聞に出た静大生か!いやいや、驚いたねえ。机上の空論を嫌い、自身の教育を実践しようとしているあの学生が、君か!」

「ところで、君。聞きたいことがある。」「えっ、何でしょうか?」「君ねえ、毎日この店に来て、『大将、いつもの』と言うと、大将は『あいよ』と言って、ビール1本とマグロのぶつ切り丼を出してくる。君は、ビールを豪快に空け、マグロ丼を食べ終わった後、なぜか厨房の奥に入っていく。30分ほどして、君は厨房から出て帰っていく。これは何?」「いや、私は大将と、ビール1本とマグロのぶつ切り丼で500円(当時)。その代わり、その後厨房に入って30分食器洗いをする約束を結んでいることを、先生に伝えた。当時から酒好きな私の窮余の策であった。

さて、私はいつも寿司屋で居合わせる男性が受講している刑法の先生と知って、策を練った。当然に前年度受講の刑法は、会社設立の多忙さで殆ど出席できずに単位を落とした。(故

に先生の顔も覚えていなかった。) 従って、落としてはならない2度目の受講の刑法の単位取得の策である。当時大学の先生は試験の2週間前までに大学事務局に、試験の題目を封筒に入れ提出する慣わしがあった。それ以降は、その題目を変更できない。それを知っていた私は、試験前2週間を切ったその後毎日その寿司屋に出向き夕食を食べ皿洗い後も、先生がいれば店に残り、先生と酒を交わしながら、友達の授業ノートの写しを元に刑法を議論した。勿論、その議論を通じて、既に確定している試験題目を必死に探ったのである。

そうして挑んだ前期刑法の定期試験当日。朝、私は仕事の段取りをつけ、ギリギリで刑法の400名収容の大講堂に入った。すると、いきなりN先生のマイクの声が響いた。「よう！おはよう！や・ま・し・た・くん。」学生達のどよめきが起こった。「今期の刑法の授業で初めて君に会ったね。」学生達はドッと笑った。「自分が描く教育を実践するために会社を興し多忙な彼のために、『代返』に協力した友達諸君、よくやった！私は君達の『代返』を見抜けなかった。故に、君たちの友達想いに免じて『代返』は許す。しかし、山下君。君は違う。今日の試験で君の刑法の単位取得か否かが決まる。心して解答しろ。」と言って、先生は自身が事務局に提出した「試験題目」が記された封筒を開け、黒板に2題、試験題目を書いた。1題目を書いた時、先生はチラッとこちらを向いた気がした。その題目が、私が寿司屋で先生に真っ先に質問した「罪刑法定主義」だった。「刑法の罪刑法定主義について、具体的な事例を挙げて説明せよ。」先生のチラ見の意味が分かった。「しめた！」私は、暫し考え、「代返」を例に罪刑法定主義について論じた。2問目の題目は覚えていない。

当然に後日大学の学生掲示板に、私宛にN教授の研究室に来る旨の掲示が出され、2度目の単位取得不可の通告を覚悟に、N先生の研究室に出向いた。ところが、先生から㊦と押された私の解答わら半紙を渡された。先生曰く、「調べたら、去年は君の刑法受講は出席未了で単位認定はできなかったようだね。しかし今年度の再受講では、君の友達らの『代返』によって記録上君は『皆出席』になっている。試験当日に話した通り、見抜けなかった私の不覚である。しかし、今回私が提示した2つの試験題目に対する君の解答は、見事だった。でも、あの寿司屋でこの前期試験の題目を探る君の言動は、民法の『公序良俗』の規定に反する。だから、私は君の解答に㊦の判定をした。」勿論、後期は無理してでも仕事を調節し、数回休むことはあったが、刑法の授業には極力出席した。よって、私は大学の一般教養課程を通過した。その後も先生と飲むことは、先生が静大を定年退官し獨協大学に移るまで続いた。

静岡大学名誉教授になられた先生は、数年前文化勲章(何の賞だったか、詳細は覚えていない)を受賞された。コロナ禍で早速先生にお祝いのお電話をした。「嬉しいねえ、君が一番目の祝いの電話だよ。」と、お言葉を頂いた。

2025年現在、起業してから50年、大学を卒業してから48年になる。以来、私は実に多くの生徒達が、高校に、大学に進学するお手伝いをさせて頂いてきた。小学校から高等学校まではその名に「校」の字は入る。それは、「校正」の「校」。即ち、先生が児童・生徒達の考えの誤りを校正するところという意味が込められている、と私は教えられた。しかし、大

学は違う。冒頭に書かせて頂いた通り、大学は「大いに学ぶ」ところだ。少なくとも本稿に登場した M 講師や G 教授、O 教授に、N 教授は、そう私に語ってくれた。だから、法的にも「大学の自治」が守られている。本稿で書かせて頂いた通り、私は身をもってそのことを体験した。それ故に、私は小中学校や高校で不登校を経験した子ども達でも、大学進学までの支援をさせて頂いてきた。それは、「学歴社会」云々ではない。哲学を学びたいと京都大学に進学した生徒や、医者になって人の命を救いたいと地元・浜松医科大学に入学した生徒、いや、なにがなんでも日本のトップ(?)の東京大学に行きたいと進学した生徒、はたまたコロナ禍で授業が開講されないため志望大学進学を諦め、地元の大学に進学し、念願のデータサイエンス企業に就職した生徒など、実に様々な生徒達が「大いに学ぶ」姿を応援させて頂いている。そのように私を導いて頂いたのは、本稿の M 講師や G 教授、O 教授に、N 教授にもう一人、本稿で書けなかったが、私が所属した労働法ゼミの指導教官であった S 教授(いずれも当時)であった。この場をお借りして、皆様に深く感謝申し上げる次第である。